

続文化は、
今に生きる

そうさ「天道さまと米の飯は、どこへもついてまわる」これは、そうとうな強がりのいい分。

お天道さま、太陽は、直径一四〇万kmの恒星。その七三%が、水素。核融合を繰り返して、

夏至の日に

深澤芳樹

生みだす莫大な熱と光を、地球上の生物は、享受し生きている。太陽系の文字どおり中心にあって、惑星をひきつれ、二億年かけて天の川銀河を一周する。

夏至ゆうべ 地軸の軋む 音少し 和田悟郎

太陽の図が、中国前漢の湖南省馬王堆一号漢墓で見つかった。

『史記』に登場する長沙国初代

軟侯利蒼の、夫人の墓でその絹

帛が棺にかかっていた。そこに、

太陽とともに、女主人が崑崙山

へ昇仙するようすが描いてあった。

太陽は、合計九個(挿絵)描いてあり、どれも木(扶桑)の枝

にかかっている。一番上の太陽が

大きく、なかに二本足の黒い鳥

がいる。中国美術史研究者曹布

川寛さん『崑崙山への昇仙』中公

新書に、絵解きしてもらおう。

『山海経』『淮南子』『楚辞』

などの中国の古典に、「日の中に

駿鳥有り」とあり、後漢の高誘は、

「駿とは蹲のときなり、三足鳥

を謂う」と注した。なお三足の鳥

の図像は、後漢以降にあらわれ

る。もともと太陽は十個あつて

一日ごとにべつの太陽がのぼる仕

組み。だから九個しか描いてい

ないのは、天に一個のぼっている

からで一番上の大きな太陽は、

つぎにのぼるように順番を待つて

いるところなのだ。

『古事記』によれば、カムヤマト

イハレヒコが難波から大和に入る

うとして兄を失う。その理由を、

伝承文学研究者三浦佑之さん

『口語訳古事記』(文藝春秋)は、

「日の神の御子として、日に向か

つて戦うのがよくないのだ。…

今から行き廻つて、背に日を負

うて戦おうぞ。」と訳した。ヤマ

トイワレヒコは、アマテラスの直

系子孫だった。まず熊野にむか

う。そこから八咫鳥が先導して、

吉野、宇陀。そして東から大和

にはいった。この八咫鳥こそ、神

の使い、ミサキ(御先)にあたる。

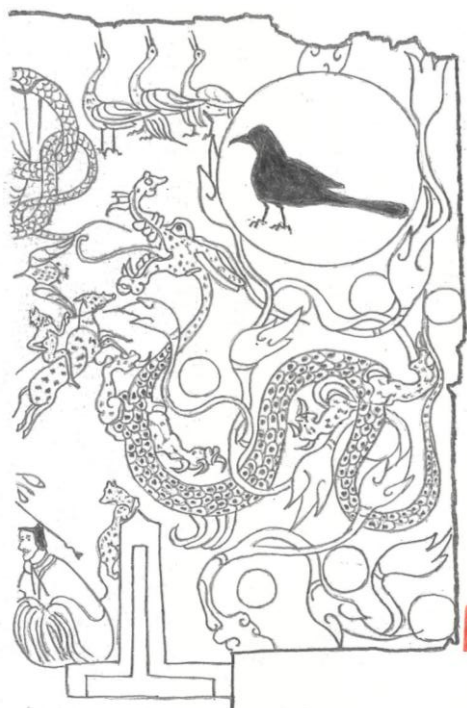
北関東では正月に鍬初めの行

事をおこない、鳥占いともい

う。それは、「オミサキオミサキ」ヤヒキ、カラスビシヤク、カラスム

とか「カラスカラス」と連呼して、

たぐ飽きて とんとん歩く 鴉の子 高野素十
鳥は、スズメ目カラス科カラス属の全身黒い羽毛の鳥。ハシボソカラスとハシブトカラスの二種類が、日本列島で九州から北海道に広く生息する。農山漁村の人里にいて、今が産卵の季節。
鳥は、ときに太陽そのものであったり、神の使いでもあった。鳥を見る人の目は、ついこの前まで恐れ敬い、それに親しみと優しきで満ちていた。
鳥なぜ啼くの
鳥は山に
可愛七つの子があるからよ
可愛可愛と
鳥は啼くの
可愛可愛と
啼くんだよ
山の古巣へ
行つて見て御覧
丸い眼をした
いい子だよ
(七つの子)野口雨情作詞 本居長世作曲 一九二二年発表
(日本考古学)



鳥がいる太陽、中国馬王堆1号漢墓帛画から (深澤芳樹写)